

優秀賞

星空の下 起こった奇跡。

高松市立鶴尾小学校五年 久保田 遥

「うーん・・・」

私は如月萌香、中学二年生。私は今、とても大きな問題を前にしている。

「優莉、どうしよう。お姉ちゃん、先輩に殺されちゃう。」

妹の優莉にも、そんな風に言ってしまった大問題。それは文化祭で発表の小説がまだ書きあがっていないということ。私が入っている文芸部では、文化祭までに小説を書きあげて発表しようという事になった。初めは一つの小説をみんなですべて書こうと言っていた。その小説はすぐに書き上げることができた。それでもまだ文化祭まで時間があつたので、部長にもう一つ自分で書いてきてもいいか聞いてみた。すると部長はあっさり了承してくれた。その時は、

「頑張るぞ！」と言う気持ちですぐに

書き始めた。小説は、二年間でいくつ

も書いてきていたので、どうしても、書き

同じような感じになってしまい、書き

進めることができなくなった。どうし

よう、と本気で焦っていると優莉に、

「一回気分転換で外出してきたら？ちよ

っと寒いけど、星、綺麗だよ。」

と言われた。私はこくりと頷いて上着

を羽織り、外に出た。空を見上げてみ

ると、とても星がきれいだった。

「こんなの見たことない！綺麗！」

空いっぱい星が広がり、まるで宇宙

の真ん中にいるようだった。ふと気が

付くと、少し離れたところで小学三年

生くらいの白い服を着た男の子が立っ

ているのが見えた。「え？」私は起きる

はずがないことが起こっていることに

混乱して、家の窓の方を見た。優莉も

男の子の方を見ていた。口を押えて、

青ざめた顔をして。急いで家に帰ろう

とした、その時だった。一斉に星が流

れ始めた。それは一瞬の出来事だった。

星は何事もなかったかのように空で光

り輝いていた。突然、強くて冷たい風

が吹いてきた。はっと我に返り家の中

に戻った。優莉に聞いてみた。

「ねえ優莉、あの男の子って・・・！」

優莉は青ざめて言った。

「碧斗だよね・・・。」

私は言葉が出なかった。やっぱりそう

なんだ。一年前、交通事故で亡くなっ

た弟だ。家族全員大号泣だったな。私

が一番落ち込んでいたんだっけ。その

時、頭の中にぱつと小説のネタが思い

浮かんだ。私はすぐに書き始めた。そ

して次の日。

「書けた！」

小説が書き終わった。部長は休みだっ

たので副部長に見てもらった。「いい

ね。」と言ってくれた。ほかの部員たちからも大好評だった。文化祭の日、小説を発表すると、何人かが興味を示してくれた。そしてお披露目が終わり、小説を並べると何人かが読んで、感想を伝えてくれた。

「お疲れさまです。」

部室に戻ると、ほぼ全員が集まっていた。不意に、部長に強めに名前を呼ばれた。

「すごい良かった！あの小説は天才だよ！」あの呼ばれ方だったので、てっきり怒られるのかと思った私はきよとんとしてしまった。部員たちが、部長に続くように「書くコツとかあるの？」などいろいろ言ってくれた。そのうちに、やっと頭が追い付いて「ありがとう。」と言葉にした。この日はもう何をするともなく解散になった。どうして死んでしまったはずの弟がはつきり見えたのか、急に流れ始めたあの星たちは何だったのか、今でもそれは分かっている。

「うわあ！」

「キーーーーー！」

トラックのブレーキ音と僕の悲鳴が混じった。交通事故だ。僕は小学三年、如月碧斗。この日は姉ちゃんの萌香と優莉の二人と公園で遊ぶ約束をしていた。僕は少し遅れて一人で公園に向かった。公園の前の横断歩道。姉ちゃんたちは僕に気づいて公園の中から手を振っていた。横断歩道の信号が青になり、渡ろうとしたその時だった。大型のトラックが突っ込んできた。姉ちゃんたちはすぐに僕に駆け寄ってきてくれて、周りの人たちも救急車を呼んでくれた。僕はすぐに病院に搬送されたけれど、助からなかった。それから一年くらいたったある日、僕の家だった場所から少し離れたところで星を見ていた。いつもより何倍も星がきれいな気がした。すると萌香が家から出てきて、空を眺めながら「小説どうしよう。書けないかも。」とつぶやいていた。何か力になれないかな、そう思った僕は空に願った。姉ちゃんが小説を書けますように……。お願いしても仕方がないかな、と帰ろうとした時だった。空の星が一斉に流れ始めた。一瞬の出

来事にただ立っていることしかできなかった。ふと、優莉がこつちを見ていることに気が付いて、僕はパチンと手をたたいた。手をたたくと、空へ帰ることができんだ。最後に僕は心の中でこう言った。

「またね。」